



2016年4月17日(日)
夙川教会主日礼拝説教



「投げ込まれた毒麦」

マタイによる福音書13：24—43

真実を語る鏡

グリム童話の中にある『白雪姫』という作品は、広く知られ、親しまれております。あるところに、とても美しいのですけれども心はとてもみにくい女王がおります。その女王は、自分より美しく成長した白雪姫の存在が許せず、嫉妬心から彼女を殺してしまおうとするのです。けれども、そのくわだてはいずれも失敗してしまい、最後に白雪姫は王子様と結ばれる、というお話です。

この物語は、女王よりも白雪姫の方が美しい、という事実が判明した時点で動き出してゆきます。そして、その事実を明らかにするのが「魔法の鏡」という不思議な鏡であります。もちろん実際には存在しませんが、物語の中では「質問に対していつも真実を答える」ということになっています。絵本の中では「鏡よ、鏡よ、鏡さん、世界で一番美しいのはだーれ」というふうに、女王は鏡に問いかけます。白雪姫はまだ幼いうちは、女王が世界一美しかったのですけれども、白雪姫が成長して、女王の美しさをしのぐようになった時、鏡は「白雪姫の方が美しい」と告げたのであります。

さて、この魔法の鏡ですが「いつでも真実を語る」というところが、いかにも童話らしいところで、現実にはあり得ないのはいまでもありません。けれども、もし、この「魔法の鏡」が本当にあったと仮定して、みなさんがこんなことを聞かれたら、どのような答えが返ってくるのでしょうか。「わたしは最後の審判の時、救いに入れられるのでしょうか。それとも滅びに入れられるのでしょうか」と。いつも真実を即答する鏡ですので、たちどころにその質問に答えることでしょうか。では、どのような答えが返ってくるのでしょうか。「心配することはありません。あなたは救いに入られます」という返事が間違いなく返ってくると信じているのですけれども、もしかすると「残念ながらあなたは滅びる運命です」と言われてしまうかもしれません。そうなったときのことを考えると恐ろしくなると、とても聞くことができないのではないのでしょうか。こう考えると、いつも真実を告げる鏡などというものが、実際に存在しなくてよかったですと、胸をなでおろすのであります。

どうしてこういうことを考えるのかと言いますと、救いと滅びの裁定は神さまが下されるのであって、わたしたちはその裁定に口を挟むことはできないし、その裁定の結果をいささかも変えることはできないという、緊張感系の中で生かされているからであります。自分が救いに入れられているのか、滅びに入れられているのか、究極的には神さまが決められることで、わたしたちはそれを知る立場にはないのであります。では、どうしてこの世界に、このような緊張関係が生じているのでしょうか。今朝与えられたみ言葉では、それは、この世界に毒麦が投げ込まれているからである、と説明されているのであります。

毒麦の譬え

今朝の礼拝に与えられております聖書の御言葉は、「毒麦」の譬えと呼ばれているところであります。たとえそのものはとてもわかりやすいものであります。「ある人」が良い種を畑に蒔くのです。良い種ですから、成長すれば必ずよい実を実らせるはずの種であります。そこで僕たちはよい実りを期待して、収穫の日を楽しみにして、日々の働きに勤んでおりました。ところが芽が出て実ってみると、毒麦が混じっていたというのです。僕たちはどうして毒麦が混じっているのか理解できず、主人のところへ来て言うのです。「だんなさま、畑には良い種をお蒔きになってではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか」と。つまり、この世界は神の世界であるはずなのに、どうして神がお造りになされた良き世界に、罪や悪が存在するのか、という問いを投げかけているのであります。主人はすぐさま答えます。「敵の仕業だ」と。この世界は確かに神さまがお造りになされた良い世界でありますけれども、そこに敵がやってきて毒麦の種を蒔いていったというのであります。

さて、実はこのたとえの意味については、主イエスご自身による解説が後でできます。今朝は24節から30節までの譬えそのものところを読んでいただきましたが、少し後の36節以降に、この譬えの説明がなされているのであります。37節から読んでみましょう。「良い種を蒔く者は人の子、畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである」と説明がなされています。

救いと滅びは混在している

この譬えが教えていますのは、この「世界」という神さまの畑には、良い麦だけが育っているのではない、ということであ

ります。そこには敵の蒔いた毒麦も一緒に混ざっているといわれるのです。それは、この世界には救いではなく滅びに入れられているもののまたいるのだということであります。つまり、表面上は分からないけれども、ある人は救いに、またある人は滅びに定められているということになります。良い種は成長して良い実りを実らせますが、毒麦は毒麦にしかありません。すなわち、救いと滅びとの緊張関係がそこで生まれるのであります。

しかし、ここで注意しておきたいことは、本来このたとえが意図しているのは、わたしたちをいたずらに恐れさせたり「あの人は毒麦なのではないか。いやあなたこそ毒麦ではないか」と、裁き合いをさせるためではないということであります。そうではなくて、このたとえは、わたしたちが信仰と理想を履き違えないためのものなのであります。信仰に生きることは、何も理想に生きることではないのであります。倫理的な生活のお手本のような生活をして、自他共に認める「良い人」になることが信仰なのではないということであります。

確かに、世界に悪がはびこるとき、あちこちで人々の欺瞞や嫉妬、裏切りや傲慢の罪が見えてくるとき、神さまを信じている人たちは、それよりはましな生活をしていると自認するようになります。そして、いつしか自分は、罪の世の人々よりは少しはましな人間であると考えて、理想を追い求めてしまうようになってしまいます。そして、地の塩、世の光としてのわたしたち、また教会のあるべき姿を思い描き、その理想に突き進もうとします。しかし、信仰の目標とは、そのような人間がこしらえあげた理想の姿を実現することではないのであります。

信仰とは理想を生きることではない

そのことを知るための一例として、次のような例をご紹介します。宗教改革者として知られ、教会の歴史において、また一般の歴史においても偉大な足跡を残したカルバンは、彼もまたある意味で理想に燃えた人であったといつてよいでしょう。しかし、彼の理想としたキリスト者の生活というのは、それはそれは厳しいものでありました。スイスのジュネーブはカルバンの町として知られておりますが、カルバンの理想はそのジュネーブを神の都にすることでありました。教会の中だけでなく、町全体を、今朝のたとえでいうところの神の畑であるとみなしたのであります。そのために、カルバンはジュネーブの市民に質素な生活を義務付け、華やかな装飾品で身を飾ることを禁じました。そのために、金細工職人が職を失ってしまったとも伝えられます。トランプ遊びやダンスといった娯楽のたぐいも禁じられました。また、礼拝をサボったものには罰金が課せられるということも定められました。教会の長老が市民たちの見張りを務めるにつき、決まりを破ったものは密告されることもあったそうであります。こうしたことによってカルバンの神学的な業績が揺らぐことはありませんが、しかし、人間の理想というのはどこまでも人間の理想なのであって、それが本当に神さまの求めておられることなのかどうかは、別の問題であろうとの思いを持ちます。わたしたちには、その行いによって、毒麦を良い麦に変えることはできないのであります。

けれども、この毒麦のたとえのなかに登場するしもべたちは、まさに理想主義的なところがあるのであります。神の畑に毒麦などがあつてはならないという考えなのであります。毒麦などはすぐに取り去って、そしてこの世界を良い麦だけの世界にしようとしているのです。ですから、しもべたちは、主人の「敵の仕業だ」という言葉を受けて、すぐさま「では、行って抜き集めておきましょうか」と、提案するのであります。わたしたちもまた、教会に対して、世界に対して、また私たちの家族に対して、あるいは自分自身に対して、ある理想を持っているかもしれません。理想という言葉が少々美しすぎて現実味がないとすれば、たとえば「こうなったらいい」「こうであるべきだ」「本来はこうでなければならない」という考え方を持っているのでしょうか。そして、自分のその考えにそぐわない現実を見つけますと、僕たちのように「では、行って抜き集めておきましょう」ということになるのです。

そのままにしておきなさい

ところが、このたとえのなかで、主人は僕たちの提案を退けて次のように言うのです。「いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい」と。つまり、主人の命令は「そのままにしておきなさい」というものだったのであります。「あなたたちの世界はそもそもにおいて、初めから毒麦が投げ込まれた世界なのであり、あなたがたの仕事は毒麦を抜くことではない」とおっしゃっているのです。「あの人が毒麦だ、いやこの人が毒麦に違いない」と裁き合うことは、あなたたちのなすべきことではないといわれます。毒麦を抜きたくするのがわたしたちでありますけれども、あえて、そのままにしておきなさいと言われた主の御心に生きる時、裁き合うことの苦しみから救われるのであります。

しかし、ここでわたしたちが思いますのは、どうして主人はよい麦まで抜いてしまうことを、それほど心配したのかということであります。毒麦がそれとわかるならば、毒麦だけを抜き取ることは容易なのではないでしょうか。どうして収穫の時までそのままにして、場所をとらせておかなければならないのかと、訝しく思うのであります。

そこで、この譬えに登場する毒麦についてなのであります。これは実際にあるイネ科の植物でありまして、他の穀物に紛れ込んで、その価値を落としてしまうもののようにあります。どのようにして、他の穀物を台無しにしてしまうかという、

毒麦自体に毒はないのでありますが、表面に付着する糸状の細菌が毒素を作り出し、それをまちがって摂取してしまうと中毒症状を起こすとされています。そしてその毒麦は、まだ若いうちは小麦にそっくりなのだそうであり、大きく成長するまで、それが毒麦であるかどうか判別できないそうでもあります。しかし、それが毒麦であるとわかったときには、すでに根っこがまわりの小麦の根っこに入り組んでしまうため、抜こうとするとからみあった根っこを通じて、となりの良い麦までが抜けてしまうことになるのだそうです。そこで、実際に、毒麦を取り除くためには収穫の時期まで待たなければならなかったのであります。そういう、実際の体験がもとになっております。

しかしながら、これは単なる実際の体験というだけではなく「毒麦を抜こうとすると良い麦までもが抜けてしまう」というところに、わたしたちの世界の闇の深さ、罪の深さが表れているように思うのであります。根が入り組んでしまうほどに、毒麦は良い麦とひとつになってしまっているということでもあります。それはもはや「あの人は毒麦だ、あの人は良い麦だ」と、はっきりわけてしまうことができないほどに、良い麦と毒麦が入り混じっているということです。それは、一人の人間の中に、すでに良い麦と毒麦とが入り組んでしまっているようなものなのではないでしょうか。わたしたちは神さまの恵みによって義とせられ、地の塩、世の光とされたのですから、正しくあろうとし、善意の人であらうとしますけれども、すでにその手の業には罪が絡みついているのであります。毒麦を抜くという行為は、実は自分自身を罪に定めることと変わることがないのであります。

実際にわたしたちは、良いことも言いますし、悪いことも言います。正しい判断を下せる時もありますし、悪い判断だったと後悔しなければならないときもあるでしょう。そのようなわたしたちにとって「毒麦が存在してはならない」とおっしゃっておられないことが、むしろ慰めとなるのではないのでしょうか。

混沌とした世界の中に生きる

むしろ、毒麦と良い麦とが入り混じる混沌とした世界のなかにこそ、神さまは生きておられるのではないのでしょうか。主イエスがわたしたちの世界に来られたのはまさにそのためでありました。主イエスはわたしたちに罪の現実を担って生きよ、と言われたのであり、罪の現実から立ち去りなさいと言われたのではないのです。ですから、わたしたちに求められているのは、この良い麦と毒麦が入り混じった現実を生きることであります。毒麦が投げ込まれた世界と、毒麦が入り込んだ自分自信を受け入れることであります。信仰というのは理想を追いかけて夢を見ることではないのであります。罪深く、罪にまみれた自分自身を深く見つめ、そのようなものがそれでもなお神さまの恵みによって生かされているという現実を直視し、目の前の現実を生きていくことが信仰の歩みなのであります。主イエスご自身が、まさにそのような現実を生きぬかれ、ご自分を十字架につけようとする人々のために祈ってくださったのであります。

わたしたちに赦されていること

白雪姫を殺そうとした女王も、そもそも「魔法の鏡」などというものを持っていなかったら、白雪姫が自分より美しいなどということが分からなかったし、白雪姫を殺す必要もありませんでした。魔法の鏡が自分の意にそぐわないことを告げたために、女王は現実を自分の思うままの現実に変えようとしたのです。魔法の鏡が告げるのは真実であります。しかし、真実というのは、わたしたちが知るべきものではないものなのかもしれません。麦の中に投げ込まれた毒麦があり、毒麦を抜いてしまいたいと思うのがわたしたちですが、このたとえによって、それはあなたがたの仕事ではなく神さまのすることだと教えられています。わたしたちには何が毒麦であるかわからないし、その毒麦はわたしたちの現実に深く根を下ろしており、それだけを抜き去ることもできないからであります。「わたしはこの世の終わりの最後の審判の時、救いに入れられるでしょうか。それとも滅びに入れられるでしょうか」という問いも、わたしたちにその答えを知ることは赦されてはいないのです。

では、わたしたちには何が赦されているのでしょうか。それは、救いに入れられていると信じて歩むことであります。神さまの真実はわたしたちを滅びに定めるのではなく、救いに定めてくださるからであります。主イエスは「パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか」(マタイ7:9-10)とおっしゃいました。わたしたちの望むものを差し出し、与えてくださる神さまの愛を信じてよいのであります。そして、この毒麦の入り混じった世界の中に根を張って生きてゆけばよいのであります。わたしたち、神さまがわたしたちを愛して下さっているという真実に依り頼むものだからであります。